



希望にとりかかる：核軍縮に関する「パックス・クリスティ」作業部

核軍縮に関するパックス・クリスティの作業部会は、75年前にパックス・クリスティとともに生まれた希望の体現であり、核兵器のない世界への希望である。

■ ジョナサン・フレリッヒ（パックス・クリスティ国連軍縮担当代表 ジュネーブ）

本作業部会は、2016年という好機に結成されました。この年、核兵器の人的影響に関する3つの画期的な会議が開催され、軍縮のダイナミクスが変化し、世界の大多数の政府と幅広い市民社会組織が、「核兵器がいかなる状況下でも二度と使用されないようにすることは、人類の生存のために極めて重要である」という一つの信念の下に団結していました。この新しい作業部会が現教皇の任期中に結成されたことも幸運でした。

確信 昨年11月、長崎と広島で、教皇フランシ

スコが、核兵器の使用だけでなく、その保有も非難したことは、核兵器を憂慮する世界中の市民に感動を与えました。教皇の明晰さは、核の危険性を暗い沈黙から真実の明るい光へと導いたと言えます。私たちのグループの数名は、パックス・クリスティを含む国際核兵器廃絶キャンペーン（ICAN）がノーベル平和賞を受賞した2017年、400人の平和運動家、外交官、教会指導者の前で教皇が同じ指摘をしたのを聞いています*1。私たちは、教皇のこのメッセージが、日本にも伝わるように希望し、働きかけ

てきました。

教皇の訪日の前後、私たちはカナダと日本の司教会議の行動に心を動かされました。両司教会議はそれぞれの政府に、核兵器禁止条約への署名と批准を求めたのです。核兵器禁止条約は、現在の批准国に加えて12カ国が批准すれば国際法となります。カナダの司教たちは、他の教会の指導者たちとともに、カナダ政府に対し、「同盟国と協力し、敵対する可能性のある国々にも巻き込んで、核による全滅の脅しに頼らない安全保障の取り決めを策定するように」と促しました。日本カトリック司教協議会は、教皇訪日を補完し、戦争における原爆の唯一の被害国として、日本の指導者に核兵器廃絶に向けて国際社会をリードするよう呼び掛けました。

メンバーの多くは核兵器を保有している、あるいは依存している国に国籍を持っていますが、核兵器を「持っている」「頼っている」という言葉には、厳しい現実が隠されています。過去75年間、これらの国は人類を無差別破壊で脅し、国際問題において核のアパルトヘイトを実践してきているのです。実際、私たちの国の指導者たちは、何百、何千ものヒロシマやナガサキを破壊する意思があり、それができるようになっているのです。我が国の政府は、極端な場合のみ核兵器を使用すると主張しているが、それは、他国での大量殺人と自国での大量自殺を同時に行っているという事実を変えるものではありません。しかも、瞬時の警告で、すぐにもそのような行動に出る準備ができています。「極端な場合のみ」という但し書きは、核体制全体とそれを正当化する抑止力ドクトリンにたいする冗談としか考えられません。

経験 作業部会は、そのメンバーの幅広いスキル、職業、コミットメントに恵まれています。メンバーの一人であるパックス・クリスティのナショナル・コーディネーターは、教職、言語療法、診療所経営の経歴を持っていて、長年、教会の正義と平和のために働いていました。もう一人のメンバーは、民事訴訟の専門家で、35

年間法律の実務を行ってきました。もう一人のメンバーは、紛争に対処するための非暴力的な方法を生涯にわたって提唱し、冷戦時代に外交官となり、その後「非暴力平和隊」の設立を支援しました。数学の専門家として、ドイツの宇宙作戦センターで働いていた人もいます。彼が40年前に入会した地元のパックス・クリスティでは、武器輸出、中東和平、宗教間対話に力を入れており、彼の現在の優先課題は、ドイツを拠点とする核爆弾の撤去と、拡大する脅威であるキラードット兵器に反対することです。

英国パックス・クリスティのテレサ・アレックスサンドロはこう振り返ります。「ティーンエイジャーの頃、ジョン・ハーシーの著書『ヒロシマ』^{*2}を読み、それ以来、核兵器をなくすことを信じてきました。パックス・クリスティの仲間との出会いによって支えられ、世界に核兵器が存在し続けていることへのフラストレーションを解消するのに役立っています」。「ヨルダンでの地域集会に続き、パレスチナとレバノンの会員、レバノンのシリア難民を訪問したとき、私は深い印象を受けました」と語るのは、米国パックス・クリスティのマリー・デニスです。彼女は国際パックス・クリスティの元共同代表です。米国パックス・クリスティのメアリー・イエレクは言います。「2017年の核兵器禁止条約に至るまでの活動は、国連でのセッション、個々のミッションへのロビー活動、世界中の創造的で知的で情熱的な人々との出会い、そして核軍縮に関するバチカン会議で締めくくられました」。

チャンス 核兵器禁止条約は、健全なペースで署名・批准されており、発効までに必要な批准はあと12か国となっています。しかし、核保有国と同盟国は、協定を非難し、却下し、無視するために相当の時間を費やすことになるでしょう。

核兵器禁止条約は核兵器を違法化するものです。核兵器を現在よりももっと非合法化する方法があります。オランダ・パックス（旧IKVパックス・クリスティ）の活動によって、どの銀行や投資ファンドが核兵器に資金を提供して

いるのか、どの企業が核兵器の製造に関与しているのかについて、詳細な情報が国際社会に提供されるようになりました。BNPパリバ、ドイツ銀行、ノルウェー政府年金基金は、核兵器への投資を削減または終了した77の金融機関の中に含まれています。英国パックス・クリスティは、銀行、年金、核兵器に関する諸宗教プロジェクトで、責任ある投資を提唱し、促進しています。

欧州の5カ国には米国の核兵器が常時配備されています。パックス・クリスティの核軍縮作業部会には、これらの国のうちオランダ、ベルギー、ドイツ、イタリアの4カ国にメンバーがいるため、基地や政府ロビーでの抗議行動が、定期的に行われています。フランドル・パックス・クリスティは、各国の核兵器に反対する国会議員に働きかけ、核兵器の撤去に向けた議会間のイニシアチブを促しています。

国際パックス・クリスティのもう一つの世界の優先課題は、ラテンアメリカの鉱業、伐採、その他、採鉱産業の影響を受ける地域社会とのアドボカシー協力です。中南米とアフリカのパックス・クリスティのパートナーは、彼らが直面する経済的・生態学的不公正が核の脅威にも関連していることを認識しています。戦略的鉱物の開発はその一例であり、事実上すべての核兵器実験が先住民族の領土で行われてきたこともその一例です。

国際パックス・クリスティは、各国に核兵器禁止条約への署名と批准を求めるICANの世界的な取り組みの一環として、活動しています。このことは、コロンビアとコンゴ民主共和国のパートナーに説明され、彼らは自国の外務省に連絡を取り、パックス・クリスティの国連事務所を通じて、ニューヨークの彼らのミッションにも同様の要請を行っています。

チャレンジ 核兵器のない世界への道は、課題、チャレンジで舗装されています。現在の例をいくつか挙げてみましょう。

- パックス・クリスティの核軍縮作業部会のメ

ンバーのほとんどが核兵器保有国とその同盟国のメンバーであることは適切である。しかし、パックス・クリスティは5大陸に120の加盟団体を擁しているため、とくに核兵器を拒否している大多数の国からのメンバーを新たに作業部会に迎えるのも妥当と考える。

- 新たな核軍拡競争が始まった。何十年にもわたって核兵器を制限してきた条約が、更新されることなく失効しつつある。核保有国は兵器の近代化を進めている。米国は、他の10の軍事大国を合わせた数よりも多くの軍事費を支出している。このような傾向を逆転させなければならない。
- 不思議なことに、世界で最も恐ろしい兵器を持つ9つの国は、微小の新型コロナウイルスから身を守るための対応が、きわめてお粗末。新たな国家的優先事項が必要であり、いのちを脅かすことから、いのちを救うことに膨大な資源を充てるべき。
- 広島・長崎から75年経った今も世界は核滅亡の危機にさらされている。パックス・クリスティはいまだに癒しと和解のために活動を続けている。

パックス・クリスティの75周年のクライマックスは、広島での世界集会であるはずでした。ふりかえり、感謝、交わりと再生の 때가、実現されないのを残念に思うと同時に、いのちを守るための中止に感謝しなければなりません（詳細はp.12をご覧ください）。原爆投下75周年は、脆い共通の運命に直面していることを、改めて感じさせる世界への警告です。安全を共有する所には、核兵器の場は存在しません。パックス・クリスティ75周年のモットー「ともに平和を構築しよう」は、希望の実践への招きです。（翻訳：弘田しずえ）

* 1 2017年11月、バチカンで国際会議「核兵器のない世界と統合的軍縮への展望」が開催された。

* 2 ジョン・ハーシー『ヒロシマ』ピューリッツァ賞作家ハーシーによる史上初の原爆被害記録（1946年、日本語版は法政大学出版局より2003年出版）。

韓国原爆被害者 長崎、広島訪問

2019年11月の教皇フランシスコ訪日にあわせて、韓国から11名の在韓被爆一世、二世の方々が市民団体「平和と統一を開く人々」(ピョントンサ)のグループとともに、長崎、広島を訪問しました。

報告1 韓国人原爆被害者の声を教皇に伝える

■ **パク ヘヨン** (「平和と統一を開く人々」(ピョントンサ) 国際連帯業務監事)

2019年9月9日、韓国原爆被害者協会イギュヨル会長は、教皇フランシスコに「韓国人原爆被害者の大多数が日帝の植民支配により強制動員され、アメリカの原爆投下による被爆と韓国政府の無関心という二重、三重の苦痛の中に生きてきましたが、今日まで一度も国際社会の中で光を当てられたことはありません」とし、「韓国原爆被害者に慰めと励ましの手を握ってくださること」を求める手紙を送りました。

福岡空港入国審査場で5時間抑留されて

11月23日、韓国原爆被害者一世、二世の11名と「平和と統一を開く人々」(ピョントンサ)参加団は福岡空港に到着しました。しかしなんと5時間も空港内に拘束されることになりました。入国管理局側は何の説明もなく参加団のパスポートを没収し、一部のものに対しては、荷物検査、身体検査はもちろん、個別口頭審査まで行いました。参加団は長崎大司教区からの招請状などの関連書類を提示して、入国できない理由説明を求めましたが、なんの回答も受けることができませんでした。ピョントンサから長崎大司教区と韓国外交部、領事館に連絡して支援を要請し、異例な長時間の審査の末、ようやく日本へ入国することができました。

現在、韓国原爆被害者協会は、韓国政府にたいして、日本政府にこの事件の解明を要求し、再発防止の約束を取り付けるよう、要請書を送っています。一連の過程は国内外に報道されました。去る2016年、オバマ米大統領の広島訪問に際して日本を訪問した時にも入国阻止を受けました。毎回日本を訪問するたびに韓国原爆被害者たちがこのような侮辱を受けねばならな

いということは、実に酷いことと感じられます。

フランシスコ教皇に韓国原爆被害者の声を知らせる

11月24日、教皇が長崎の爆心地公園の会場の通路を通り過ぎる時、韓国原爆被害者は準備していた手紙を教皇の随行員に渡すことができました。この手紙では、韓国原爆被害者問題についての国際的な関心と、原爆加害責任の究明を訴え、朝鮮半島が世界で一番核戦争勃発の可能性が高い地域であり、韓国政府が朝鮮半島非核化と恒久的平和体制の構築を追求しながら、核兵器禁止条約に加入しないことは矛盾であるとし、韓国政府をはじめ、すべての国が核兵器禁止条約に加入することを求めました。

その後、ミサ会場の長崎県営野球場に向かいました。ミサが始まると教皇はオープンカーで移動し、参列者を祝福しました。韓国原爆被害者は、韓国原爆被害者の存在と朝鮮半島非核化、核のない世界の実現の思いをイタリア語でプリントした横断幕を教皇に向けて広げました。教皇はオープンカーが方向を変えるとときまでずっと横断幕を見つめていました。

11月26日、参加団は広島に移動しました。平和公園内の韓国原爆被害者慰霊碑に到着すると、広島で原爆が投下された午前8時15分に鳴る鐘が鳴り、参加団は黙祷を捧げました。慰霊碑近くには無縁者の遺骨塚があり、そこに彫られた名簿には韓国人の名前もありました。韓国原爆被害者について、全面的な調査をすることが必要です。

広島平和資料館では、数年前にはあった韓国入死傷者の状況の展示がなくなっていました。

社会の光を一度も受けることができず、無関心の中で生きた韓国原爆被害者たちを思いながら資料館を見学することは、心の重いことでした。

核兵器のない平和な朝鮮半島と核兵器のない世界に向かって！

期待していた韓国原爆被害者問題に対する教

皇のメッセージが出されず、教皇の韓国原爆被害者慰霊碑の訪問がなされなかったのは残念ですが、教皇に私たちのメッセージを渡すことができたことは大きな成果でした。多くの人々が、韓国原爆被害者問題解決、朝鮮半島の非核化と平和協定締結、そして核のない世界のために共に歩んでくださるよう願います。

報告2 人間の苦痛を前にして無関心でいてはいけません

■ イ ギウン（「平和と統一を開く人々」(ピョントンサ) 青年会員)

私たちは教皇が広島に来て、韓国人原爆被害者慰霊碑に参拝することを期待していました。この機会が韓国原爆被害者について知らせ、核兵器のない社会へと前進する契機になることを願って、福岡空港に到着しました。到着するや否や、ひどく不当な目に遭いました。入国審査官がパスポートを押収し、5時間拘束されました。韓国原爆被害者協会側から連絡を受けて現場に来た後藤富和弁護士は、「韓国人被爆者問題が教皇ミサを通して世界に知られることを阻み、被害者たちの入国を断念させようと、長時間拘束されたのではないか」と言いました。

その後、長崎爆心地へ向かいました。雨がしとしと降っていました。到着したとき、韓国で聞き取りがおこなわれた原爆被害者たちの話が思い浮かびました。聞き取りの際に涙を見せていた高齢者たちの深い恨（ハン）がまるで私を包むようでした。原爆を落としたアメリカは今も謝罪と賠償をしていません。謝罪どころか、核兵器のない世界を作るための歩みを邪魔しています。どうしてアメリカの覇権戦略のために、罪のない民間人たちが犠牲になって、一生を苦痛のうちに生きねばならないのでしょうか？そのことがとても悔しく残念で、その瞬間涙が出ました。韓国原爆被害者協議会のイ ギヨル副会長も、長崎で降っていた雨が、まるで原爆によって犠牲になった韓国人原爆被害者の涙のようだと所感を述べられました。

教皇司式のみサでは、私たちはその席で教皇

のメッセージに応じて、韓国原爆被害者の声を伝えるために、事前に作っておいた横断幕を掲げました。「教皇様、私たちは韓国人原爆被害者です。朝鮮半島の非核化と核のない世界の実現のために努力します。私たちを慰めと希望の言葉で励ましてください」。教皇は私たちの訴えを見つめながら通り過ぎて行きました。たとえ空港で嫌な目にあっても、核兵器のない世界に向けた私たちの声を伝えることができたように思われ、胸がいっぱいになりました。そして、韓国原爆被害者たちとともにその場にいることができたことを光栄に感じました。

高等学校2年の時、原爆投下当時、死骸さえも差別を受けた韓国人原爆被害者の様子を描いた丸木俊、位里夫妻の「からす」という作品を見ました。彼らの声を代弁するために、そして核のない世界のためにこのように活動していることは、今でも信じられないことです。教皇フランシスコは「人間の苦痛を前にして無関心でいてはいけません」と仰いました。原爆被害者の苦痛の前に核兵器のない世界が必ず実現されねばなりません。「中立」は彼らの苦痛に沈黙することです。この文章を読むすべての方が、韓国原爆被害者の声を周囲に知らせ、核兵器のない世界に向かう行動を一緒にしてくださったらいいのにあと思っています。

（翻訳：Sr.古屋敷一葉、編集：事務局）

新型コロナウイルス問題の渦中から 「やまゆり園事件」を振り返る（後編）

■ 浜崎眞実（カトリック横須賀三笠教会主任司祭）

3月、新型コロナウイルス問題が展開する中、「やまゆり園事件」犯人の植松聖被告の死刑が確定しました。新型コロナウイルスに限らず、疫病の流行にはかならず、差別と排除が起こります。「やまゆり園事件」の背後にあった優生思想、優生思想に駆り立てられた犯人自身が処分される死刑という制度。すべて、差別と排除という点で、深く繋がりがあっていのではないのでしょうか。

4. 暴力と救済、排除と援助は正反対でなく隣り合っている

ハンセン病問題では医療従事者を始め法曹界も宗教界なども国策に連動あるいは追随したと指摘されました*1。宗教界は「究極の人権侵害」とまで糾されました。国策と連動するとか追随するとは、どういうことでしょうか。

さまざまな（社会）活動をする団体や個人は権力側とつながることがあります。国家という権力とつながることは、その権力を自らの身に帯びて行使することになります。その権力行使がお気に入りの人に向かう場合には、「支援・援助」あるいは「救済」となります。しかし、そうでない場合、あるいはお気に召さない人に対しては「排除」になり「暴力」にもなります。権力とつながると両面をもつのです。個人の好き嫌いの次元では済まなくなります。

暴力や排除と救済や援助とは正反対で、遠く隔たっていると考えるのが一般常識です。しかし実は隣り合っているのではないのでしょうか。そうであれば、意志力を強化して、どんな人とも公平に関わる「不偏心」を身につけることが大事かもしれません。しかし道徳教育や心の鍛錬などで人格を磨くことは誰もができません。また立派で善人と評価される人にも、排除と援助そして暴力と救済は隣り合っています。そのことは、ハンセン病療養所で断

種や墮胎さらには嬰兒殺まで実行したのが、極悪非道な者ではなく、品行方正で人格者と見なされる「立派な人」でもあったとの証言からも伺い知ることができます。

暴力と救済、排除と援助は地続きですから、自らの立ち位置を自覚しない社会活動は危ういのです。人間が生きている限りもっている攻撃性が自分に向かうと「自己責任」を感じ「自己犠牲」に励み、拳句には「自己否定」にまで至ることがあります。そこには「自責の念」や「罪悪感」が張り付いているようです。それに対しその攻撃性が他者に向かうと対立を生み「排除」や「暴力」にもなります。あるいは攻撃性が社会の仕組みに向かうと社会変革を促すことにもなり得ます。そこでは人間の限界としての視野の狭さや自己中心性や自己保身に傾きがちなことの自覚が生まれてくることもあります。一人ひとりとしては特別に悪い人ではなくても、社会の抑圧的な構造の一部に組み込まれてそれを温存する側にいることに気づかされるからです。それを宗教の世界では「罪の自覚」と呼びます。そのしがらみから抜け出るには「回心（メタノイア）」という行動が伴います。それは善人になるために悔い改めて心を入れかえるのではなく、視点を変え立場を選ぶことです。その意味で、自己否定に向かうのではなく既に権力関係にある社会での「中立」は加害への加担であると気づくことが「罪人であることの自覚」にもなります。特権ある立場にいるなら、その特権を手放すこと、その特権的立場から降りることです。決して「いい人（善人）」になることではありません。

5. 優生思想が蔓延る世間の常識に抗うために

「優生思想は間違っている」とか「社会に潜む優生思想の芽を摘み取る」との主張は正しく

もったもなことです。しかしそれを主張するだけでは優生思想はなくなりません。道徳的なお説教は論外でも、「生きるに値しない命はない」とか「共生の思想を広める」とか「共に生きよう」と言うだけでも足りないのです。

キリスト教に属する者として、その終末論と黙示思想に基づく人間観や世界観とその枠組みによる救済論^{*2}を直視し、別な位置に立たないと「内なる優生思想」^{*3}には抗えません。キリスト教の救済論に含まれる人間観はナザレのイエスのものとは異なっているからです。思い起こすべきことは、イエスの実践である「神の国」運動です。ローマ帝国支配の時代に人間による人間の支配ではなく、神の支配（＝「神の国」）を宣べ伝えたのが、ガリラヤで生きたイエスでした。無条件で生存を肯定する究極の存在とあらゆるいのちを生かす働きを指し示したのです。現場から表現すると、「抑圧と差別のない社会、自由と平等の国、それっていいですよね！」となります。その具体的な取り組みは、病気の人に付き添い手当をすることと差別され排除された人（＝罪人）と共にする食事であったと福音書は描きます（病にある人の手当：マルコ1・21-34他など。罪人との共食：マルコ2・13-17、14・3-9他など）。それは、歪められた関係性を再形成し、見失われた<いのち>を関係の中で生かされて在るように再統合することでした。端的に言うと排除の境界線を崩し、変更することで「居場所」ができたのです。イメージとしては干潟のように、ドロドロとしたものが堆積しているところで魚類か両生類か爬虫類かわからないようなさまざまな生き物が生息している怪しい場です。あるいは琉球弧におけるサンゴ礁の礁池（イノ）や礁嶺（ヒシ [干瀬]）も潮の満ち引きで海になったり池や陸になったりするところです。そこは魚だけでなく貝やタコなども隠れ棲んで生物多様性に富んだ生態系をつくっている場です（表紙写真参照）。教会はそのような場となっているのでしょうか。この問いにも優生思想が潜んでいるようで悩ましいものです。

*1 厚生労働省『ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書』2005年 厚生労働省ホームページからダウンロード可能。<https://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/kenkou/hansen/kanren/4a.html>

*2 キリスト教の救済論を定式化すると、次のようになります。悔い改めた罪人〔洗礼を受けた信者〕は罪のゆるしによって救われ永遠の命を与えられる。それに対して罪人〔非信者〕には地獄の苦しみとして永遠の罰が与えられる。これは勧善懲悪の応報思想で、優生思想とは親和性があります。黙示思想とは、世界を「この世」と「来るべき世」に、人間を「義人」(善人)と「罪人」(悪人)に二分し、この二元論的世界観に基づいて勧善懲悪の応報思想を貫徹するものです。黙示思想については、上村静『旧約聖書と新約聖書』新教出版社2011年144-167頁を参照。

*3 「内なる優生思想」とは、もとは脳性麻痺当事者運動の「青い芝の会」から生まれた表現です。そこでは、障害者を差別する社会を厳しく糾弾しつつ、自らにも「障害者には価値がない」という意識が内面化されているのではないかと問いかけました。自らの内に刷り込まれてしまう仕組みを問うたのが「内なる優生思想」ということばです。私たちににとっては心の問題として差別意識に向き合うのではなく、社会構造の問題として捉え返すべきことばでしょう。

執筆メモ

社会正義とは、個人の心のありかたとか善良であるかどうかとは直接関係はありません。社会のあり方や仕組みを問うものです。それに対して、正義(感)とはその時代が尊重している価値観が個人の正義(正義感)を形づくり、時にその価値観にそぐわない人を処罰したり、そうであっても仕方がないという感覚までも育てるもののようなのです。

優生思想とは、価値や意味を求めて止まない人間の傾きから出てくるものです。価値や意味を求めて生きざるを得ないのが人間なら優生思想は無くなることなくついてまわります。その優生思想が攻撃性とか衝動に結びつかないようにすることが排除や暴力を回避することでしょう。そういう意味で優生思想を撲滅することはできません。またそれが可能だとしても、人の心や思想を強制的に変えたりすることは内心の自由に抵触し、人間の尊厳をも侵すことになると思います。私たちにできることは、優生思想が排除や暴力に向かわないようにすることを考えることでしょう。

始める。―「ヘリパッドいらない」住民の会でできること

■伊佐育子

6月23日、沖縄県は「慰霊の日」を迎えました。今年は最後の激戦地であった摩文仁の「平和祈念公園」での式典は、残念ながらコロナ感染予防により縮小され多くの方が行くことを控えました。沖縄戦の生存者が少なくなるなか、教育現場においても沖縄戦を伝える時間が減り、沖縄を取り巻く米軍に関する様々な問題も無くなっていません。平和への原点である沖縄戦を知り、現在に生かし、未来に手渡すことが必要とされているのに、現実には課題は多く積まれ、追い詰められており、崖の縁にいるような焦りを感じています。

ヘリパッドが完成してから、高江の美しい森は戦争の訓練をするための森へと、今まで以上に変わりつつあります。私たちにとっても、自然と共存する生活が、次第に米軍との共存へと変わっています。ヘリの騒音や再び起きるか分からない墜落の恐怖、時折、森から銃や砲弾の音も鳴り響き空砲だと知っているてもその的は？と思うと、日常生活をしている時間も場所も分からない戦場へと気持ちは引きずられて行きます。こんな精神的な負担はあってはいけないものです。戦争の準備は地球に生きるすべての命の脅威になっています。しかし日本政府は、このヤンバルの森を世界自然遺産登録という魔法の言葉を掛け、観光でどんどん人を呼べば地域経済を潤すことが出来るとして、予算を自然遺産登録の宣伝ために使い、米軍の訓練場には触れもしません。このことによって、訓練場には触れてはいけない、とする空気が、住民の中にも次第に生まれているように感じます。まるで、政府がアメリカに何も言えない関係が、庶民にまで感染しているようです。



写真1

そんな中で皮肉にも、今日のコロナ禍は、人の生活にとって、いかに自然環境が必要なのか、人が生きるために、どれほど人とのつながりが必要であるかを足元を見つめ直し、今まで見えていた当たり前のことが今まで以上に大切であることに目を覚まされた経験でもありました。高江のテントもこの期間しばらくお休みとなり、子どものいる家庭では子どもとの時間を満喫したり、住民の会では土地を耕し野菜を作り始めたり、知恵を出し合い助け合い分かち合うことが出来ました（写真1）。

コロナで社会が壊れ、個人の生活があつという間に継続出来なくなってしまったことは想像以上にショックでした。世界中が、コロナから一人の命を守る事に尽力し感染と闘っているのに、こんな時でさえ米軍のヘリは戦闘の訓練をして私たちの頭の上を飛び交っている。人の愚かさも見えました。

コロナ感染予防と同じで、思いやりで人との間隔を置くように、自分を大切におもうからこ他の人も大切に感じて欲しい。利益を求め経済を優先して、活かされず忘れ去られ消し去られてしまったものを、もう一度生かし重視する次世代へと世界が変化すれば、沖縄の基地の問題も変化し、光が指すのではないか。いつか「慰霊の日」は戦争の検証と戦争を2度としない「命どう宝」を世界へ発信する誓いの日になると願います。

住民の会も6月中ごろからテントに戻り監視を再開しました。早速土曜日にはシスターが車で2時間半かけテントに到着、久しぶりの再会に「元気でしたか」の握手。握手出来るのがこんなに幸福な事かと感じました。しばらくして谷大二司教と愛犬も加わり、久しぶりに笑いの飛び交うにぎやかなゲート前のランチとなりました(写真2)。高江に来ることを惜しまず絶えず共にいてくださるその姿に、信仰は行動で示されるものと教えられます。

まもなくやって来る7月1日、なんと14回目の工事再開の日をむかえます。2016年、機動隊が数と力で市民を排除してヘリパッドを完成させた時のずさんな工事は、今も続いています。工事費はもちろん私たちの税金です。今も湯水のように使われているのです。この工事は米軍が望んでいる工事とは思えません。建設工事はヘリパッドだけでなく兵士が海から上陸する歩行ルートでもありましたが、全く使われず今は草に覆われて階段や手すりはいもう見えなくなっています。税金が無駄に使われている現状を見ると、次々に明らかになっているアベ政治のお金の使い方の問題は、辺野古や高江にその根幹があるのではないかと疑ってしまいます。どうせ出来ない辺野古新基地建設は早く止めなければ、大手ゼネコ



写真2

ンに税金が使われるだけです。今こそコロナで打撃を受け苦しんでいる国民のために、税金は使われるべきです。

住民の会は、高江は遠くて行けない方や、高江の問題を知らない方にお知らせできるようにYouTubeをはじめました。高江だけでなく辺野古、伊江島、奄美大島、種子島、宮古島、石垣島、与那国島、グアム、フィリピンの情報を知って頂き、軍事拡大(米軍、自衛隊)からみると全ての島々は点でなく線になり面であり紛争地帯であることが見えてきます。

本当に改憲し戦争する国になるのか、戦場には誰が行くのか、それはあなたの家族ではないか。一人一人の場所からそれぞれの意思を示す事が問われています。前を向いてあきらめず声を上げていきたいと思います。

一年間、「高江・新月の森から…」に貴重な紙面を頂きありがとうございます。みなさんの寄り添いが沖縄を勇気付け、「あきらめない」という言葉を沖縄から発信させています。周りからの支えがないところからは「あきらめない」という言葉は出て来ません。いつもここにいられることを感謝しています。

YouTube「ヤンバル高江の現状」発信開始
<https://take.ti-da.net/>

9月1日 横網町公園の関東大震災朝鮮人犠牲者追悼式典を守る

■加藤直樹（ノンフィクション作家）

7月5日の東京都知事選は、現職の小池百合子氏の圧勝となった。その一報を聞いて私の胸中にあったのは、関東大震災から100年となる2023年を、東京は小池都知事の下で迎えることになるのかという落胆だった。

小池都知事が東京・両国の横網町公園で毎年9月1日に行われている朝鮮人犠牲者追悼式典への追悼文送付を取り止めたのは2017年のことだった。

横網町公園は、関東大震災と東京空襲の犠牲者を悼む「慰霊の公園」である。ここに震災時に虐殺された朝鮮人を悼む「関東大震災朝鮮人犠牲者追悼碑」が建立されたのは震災から50年後の1973年。当時の都議会全会派の幹事長たちを含む実行委員会の呼びかけで実現したものだ。翌74年からは、民間の実行委員会の手で朝鮮人犠牲者追悼式典が行われるようになり、そこに歴代都知事の追悼文が送られてきた。

だが17年、就任2年目の小池都知事がこの伝統をあっけなく捨て去ってしまう。以来、今日に至るまで追悼文送付は再開されていない。

そして昨年末には、追悼の場を否定する動きはさらに一歩進む。今年の式典に向けて公園の使用申請を行おうとした追悼式典実行委員会に対して、東京都建設局が公園使用についてのいくつかの条件を提示し、それを守れない場合は式典が「中止」されたり「不許可」になったりしても「異存ありません」との「誓約書」を書くように求めてきたのである。

実はこの誓約書は、追悼式典に対してだけではなく、同じ横網町公園で17年以降、「日本女性の会 そよ風」が開催している「真実の関東大震災石原町犠牲者慰霊祭」に対しても提出が求められていた。都の担当者は東京新聞の取材に対して、両者の間での「トラブル」を回避するために「公平に誓約書をお願いすることにした」とコメントしている（同紙5月26日付）。

なぜ都が両者の中の「トラブル」を心配するかと言えば、「そよ風」が在特会やネオナチ活動家とも協力する排外主義右翼団体であり、この集会在「慰霊祭」の名をかたりながら、実際



「真実の関東大震災石原町犠牲者慰霊祭」の様子（撮影：加藤）

には誰も慰霊せず、ひたすら朝鮮人虐殺の歴史否定とヘイトスピーチを行う集会だからである。彼らは例えば、「朝鮮人たちは暴徒と化して日本人を襲い、婦女を強姦した」といった内容の演説を行い、それを拡声器で朝鮮人犠牲者追悼式典の方向に向けて放送している。

だが、こうした事態に対して、両方に同じ条件を守らせ、「不許可になっても異存ありません」と誓約させるのが正しい解決策なのだろうか。いや、ヘイト集会と、ヘイトクライムの犠牲者を悼む式典を同列に規制するのは明らかに不当である。

さらにこれは、不当であるだけでなく「危険」でもある。なぜなら、「そよ風」はこの集会の目的が朝鮮人犠牲者追悼式典を「不許可」に追い込み、さらには追悼碑を撤去させることにあると公言しているからである。彼らにとって、「トラブル」さえ起こせば追悼式典をつぶせる「誓約書」は大歓迎だろう。

追悼式典実行委員会は5月18日、東京都の要求の不当性を広く訴える声明を発表した。反響は大きく、その後、個人が呼びかけたネット署名は3万人を集め、知識人たちの声明には127人と1団体が賛同した。6月22日には東京弁護士会の会長声明も発せられている。

朝鮮人犠牲者追悼式典のチラシには毎年、「この悲劇、繰り返しはせぬ」と書かれている。関東大震災100年となる3年後まで、私たちはその誓いの場となる追悼式典を守り抜くことができるか。小池都政下で、決して油断できない状況が続く。



まだまだです

■ 大口玲子 (歌人)

・ウイルスは肺から肺へ旅しゆくこのきさらぎの空を渡りて 吉川宏志「うた新聞」2020.4
新型コロナウイルスの流行は人種や国籍、思想信条や貧富の差、社会的な地位のあるなしも越え、人間の「肺から肺へ」と蔓延していった。どんな人でも感染の可能性があるという意味で「公平」なウイルス。それと裏腹に、人間社会では差別の問題が次々に表面化している。

・白人も混じる抗議デモ白人の警官も膝つき加はるを見つ 田中俊敏「宮崎日日新聞」2020.7

今年5月にアメリカで起こった警官によるジョージ・フロイド氏殺害事件の動画はSNSで爆発的に拡散され、黒人に対する暴力や人種差別が過去の歴史になっていないことをまざまざと見せつけた。これは「白人と黒人」や「警察と市民」の対立ではなく、「レイシズムとそれに抗議する人々」なのだという対立の構図をこの短歌はとらえている。アメリカ全土、さらに全世界に広がった抗議運動は私が住む交通不便な宮崎にも及び、デパートの前でBLACK LIVES MATTERのプラカードを掲げる静かなデモが行われた。そして同時期、私は市内の小さな個人商店で「中国人入店禁止」の看板が掲げられているのを見てしまう。中国人でなくても激しい恐怖を感じ、動悸を抑えつつもう一度引き返してその文字を確かめ、私の息子が育つ街にこんなものがあってほしくないため息をついた。観光地でもない場所になぜこんな看板?と思ったが、差別の感情もウイルスのように人を選ばず、誰の心にも広がってゆくものなのだろう。他人事ではなく私自身にも。

・撲殺された鮮人が眼に浮かぶのだ灼熱の巷に
ビラを撒きながら
・このへんで彼は殺られたと思ふんだ鮮人よね
むれ俺はビラを撒く

前川佐美雄『プロレタリア短歌集』1929.5

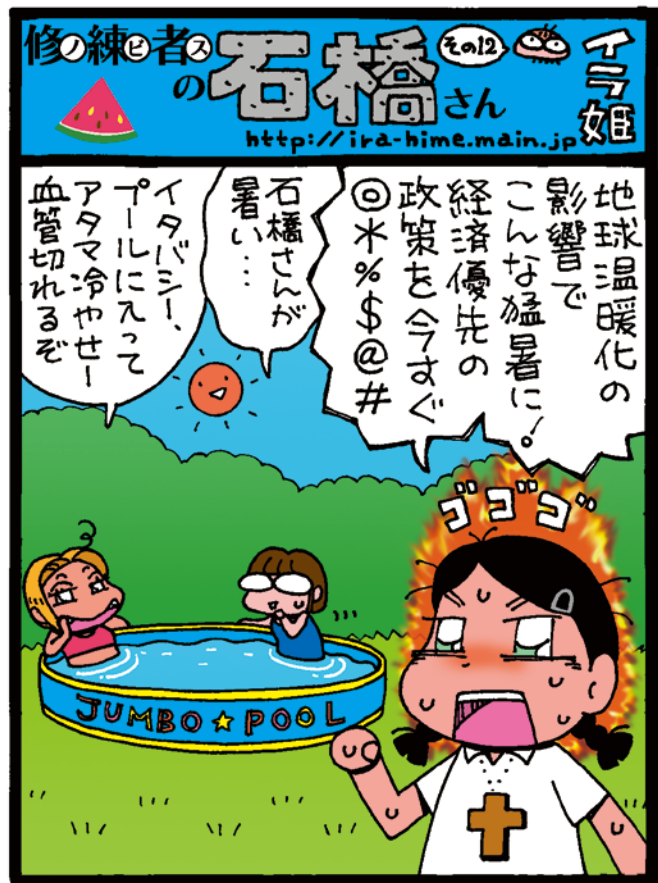
今は使われない「鮮人」という言葉にドキリとするが、作品自体は関東大震災後の混乱の中で虐殺された朝鮮の人々に思いを寄せ、このような虐殺を生んだ社会を変革するためにビラを撒くという内容である。特に二首目は、まさに虐殺の現場でビラを撒くという行動に、追悼とも慰霊ともいえる作者の思いが込められている。「隣人を自分のように愛しなさい」という律法を受けて「わたしの隣人とはだれですか」と自信満々で質問した律法学者に対し、善いサマリア人のたとえを話すイエスは「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と質問を返した。私たちが「隣人とはだれですか」と聞かれた時の答えは、「中国人」とか「朝鮮人」ではない。「隣人はだれか」と相手を品定めするよりも「まずあなたが隣人になりなさい」「隣人になって行動しなさい」というのが、今も私たちに呼びかけ続けているイエスの答えなのだろう。

・韓国と日本どっちが好きですか聞きくるあなたが好きだと答える

カン・ハンナ『まだまだです』2019.12

ソウルに生まれ、来日して大学院に在学しながらタレントとしても活躍、短歌も好きだという作者。やや優等生過ぎる印象もあるが、「まだまだです」という日本人特有のニュアンスを持つ言葉をあえてタイトルとしているあたりがユニークで、個性が光っている。韓国と日本のどちらが好きかという問いに対する「あなたが好き」という答えは、やや無礼な相手の質問を大胆にそらし、まさに自分が目の前の人の隣人になろうとすることの喜びを表現しているようだ。

それにしても、関東大震災朝鮮人犠牲者追悼式典の公園使用に誓約書が必要になったり、コロナ禍の中で朝鮮学校の幼稚園がマスク配布の対象外となったり…まだまだなのは日本のほうですね、と思っている。



- 1 希望にとりかかる：
核軍縮に関する「パックス・クリスティ」作業部 … ジョナサン・フレリヒ
- 4 韓国原爆被害者 長崎、広島訪問 …… パク ヘヨン、イ ギウン
- 6 新型コロナウイルス問題の渦中から
「やまゆり園事件」を振り返る（後編） …… 浜崎真実
- 8 （最終回）高江・新月の森から…
始める。「ヘリパッドいらない」住民の会でできること … 伊佐育子
- 10 9月1日
横綱町公園の関東大震災朝鮮人犠牲者追悼式典を守る … 加藤直樹
- 11 （連載第6回）シロツメクサの花かんむり
まだまだです …… 大口玲子
- 12 まんが「修練者の石橋さん」

表紙写真 沖縄県大浦湾の青サングの群生（撮影：浜崎真実神父 2016年11月29日）

苦虫のつぶやき

正義と平和協議会委員の声を順番にお届けします

私の父は被爆者。爆心地から2kmで被爆。市役所で働き60歳で定年退職後も、趣味の書道と畑づくりを楽しみながら福祉施設の送迎バスの仕事をしていたが、肝臓を患って65歳で亡くなった。被爆したのは5歳。あのクレヨンしんちゃんやチョコちゃんと同じ年の時に「地上の地獄」を体験した。生前はほとんど被爆体験を語ることは無かったし、国が長崎に設置した追悼平和祈念館のアーカイブにも記録がないので、父が原爆や戦争についてどのような思いでいたのか結局分からずじまい。語らなかつたこと自体が、そのつらさを表しているのだ、と思うことにした。

私も市役所へ就職し、縁があって労働組合役員となり現在に至る。就職間もない頃、職場には父も含め現役として被爆者たちが普通に働いていて、それぞれが「戦争の惨禍」を身をもって体験していた訳なので、労働組合が核兵器廃絶や平和を求める方針を掲げて活動することは、空気みたいに当たり前のことだった。

今、被爆者は最年少でも75歳、全員が後期高齢者。原爆や戦争の記憶が否応なしに風化していく中で、憲法前文にいうところの「戦争の惨禍」の何たるかを明らかに想像できていないお歴々が政治を握っている今、被爆者に身近に接してきた一人として、とても危機感を覚えている。（鳥巢雄樹：長崎教区、信徒）

編集後記

報告 今年5月に広島での開催を予定していた国際パックス・クリスティ世界大会が、本部（ブリュッセル）の判断で、いったん来年5月に延期され、6月、「誠に残念だが、新型コロナウイルスの収束の目処が立たないまま、世界中の会員に日本への渡航を呼びかけるのは、福音に反する」という理由から、中止が決定されました。まだ開催の告知をしていない段階での延期、中止の決定でしたので、略式ながら、ここにお知らせいたします。

2019年正月、広島教区に実行委員会が立ち上がり、実行委員長の梶山義夫神父（イエズス会）、広島教区を中心とする実行委員会の1年あまりの尽力で、開催まであと一歩というところでした。しかし、そのかわりに、この7月7日、3年前の同じ日、国連において「核兵器禁止条約」が採択されこれにあわせて、長崎教区高見三明大司教、広島教区白浜満司教を中心に、「核なき世界基金」が創設されました。その発端も、19年暮れに国際パックス・クリスティの数名が開催の下見に広島を訪れ、数日にわたって実行委員会と交流したことにあります。「核なき世界基金」の詳細は、ウェブサイト「核なき世界基金」(https://nuclear-free.net)をご覧ください。

核のない世界が実現するために、私たちがができる限りのことができますように (h.)



vol. 223
2020 AUG.

発行日 2020年8月1日（隔月発行）
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,800円（送料共）
郵便振替 00190-8-100347
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>